大阪商業大学学術情報リポジトリ

実演音楽が地域社会にもたらすもの
―西宮市内のライブスポットを事例に―

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2023-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桑島, 紳二, KUWAJIMA, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1662

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

実演音楽が地域社会にもたらすもの
―西宮市内のライブスポットを事例に―

桑　島　紳　二

1．問題意識
2．調査に至る経緯
3．分析の視点
4．西宮市内のライブスポット
5．ライブスポット事例紹介
6．分析
7．考察
8．終わりに

1．問題意識

1950年代、日本は高度成長期を迎え労働力の需要増により、地方から大都市へ若者の大移動が起こった。その過程で若者は地縁や血縁といった相互扶助を伴った伝統的人間関係から切り離された。それらを代替したのが会社を軸とした縁である。高度成長期から成長期にかけて、年功序列、長期雇用、手厚い福利厚生などによる会社を中心とした濃密な人間関係が築かれていった。

やがて日本経済成長は鈍化していき、バブル経済崩壊後の1990年代後半から企業は生き残りのためにリストラ（事業の再構築）の名のもと労働者を解雇するようになった。それとともに有期雇用制を導入し雇用の流動化が進んでいった。「社畜」と揶揄されるほど会社へ過剰適応していた労働者は「自己責任論」という冷や水を浴びせられ、会社との縁は一気に希薄化した。

核家族化や単身世帯も増え、人とのつながりが希薄化した都市社会の有様はNHKのドキュメンタリー番組（2010年製作）で「無縁社会」と呼ばれ社会に衝撃を与えた。それから10数年たった現在も状況はさほど変わることはなく、その脆弱性はコロナ禍によって顕になっている。

超高齢社会に突入し国力の低下が進む中、都市生活者の実状に合った「縁」をいかに構築し地域の活力低下を食い止めることができるのか、それは都市に生きる都市生活者自身にも突きつけられている喫緊の課題でもある。この問題に対して西宮市におけるライブスポットの活動状況を題材に、音楽実践を通じた「縁」の再構築の可能性について考察していく。

2．調査に至る経緯

2-1. 調査地

調査地である西宮市は大阪と神戸の中間にある人口約49万人の自治体である。江戸時代より酒造りが盛んであり、近代には東海道本線、阪神本線、阪急本線が開通し、工業化、住宅地化が進んだ。大正から昭和初期には大阪と神戸をつなぐ地域一帯に独特の建築・芸術・生活様式[1)]が生まれ、サラリーマンという新興中間層に引き継がれ市民文化として定着していった。

このような歴史的経緯から形成されてきた市民文化を基に西宮市は昭和38年に「文教住宅都市」宣言を行い、以来、市政運営の基本としている。

公民館が24館ある西宮市は「公民館の西宮」として知られ、生涯学習や社会教育や市民活動の拠点として「住民参加型」で運営されている（倉田 1990)。また、市では小中学校に対して、音楽・古典・ダンス分野のプロのアーティストが市内の小学校に赴きワークショップを行うプログラムを提供している。県立西宮高等学校には音楽科がある。大学が6校、短期大学が4校設置されており、そのうち音楽系学部を有する大学が2校ある。他にも、市内には管弦楽団を擁する兵庫県立芸術文化センターもある。

このように音楽教育や音楽に触れ楽しむ環境が整っており、音楽実践人口の裾野は広い。また、文教都市としての充実ぶりと大阪や神戸へのアクセスの良さが相まって良好なブランドイメージが形成され、住宅情報誌による住みたい街ランキングでは常に上位を保っている[2)]。

2-2. 経緯

2016年、筆者が西宮市の文化振興ビジョン第2期の策定にアドバイザーとして関わった際、市内ライブスポットのマップ作成企画を市に提案し作成することとなった。文化振興課をはじめ、ライブスポットの利用者、演奏者、オーナーからの情報を元に現地調査を実施し、定期的にライブ演奏を行なっているスポット26ヶ所を特定し、各店の基本情報を網羅したマップである「西宮ライブミュージックマップ」を2018年に作成した[3)]。その制作過程におい

1）近年「阪神間モダニズム」と総呼されている。

2）住みたい自治体ランキング2022〈関西版〉大東建託㈱ 調べ　4年連続1位、「SUUMO」住みたい自治体ランキング2022関西版 ㈱リクルート調べ　5年連続1位

3）2021年には更新版を作成した。
https://www.nishi.or.jp/bunka/bunka/joho/livemusicmap.html

西宮ライブミュージックマップ vol.2

てユニークなライブスポットの数々を目の当たりにし、これらがどのようなかたちで地域住民に利用されているのかについて興味を持つに至った。

3．分析の視点

本研究ではライブスポットにおける人の繋がりに注目し、社会関係資本の概念を用いて分析していく。

人間関係の豊かさが個人の生活や地域の安全・安心といった社会の豊かさにつながることは自明のものとされてきたが、人間関係を数値化することを通じて、社会における人間関係の価値を明示しようとするのが社会関係資本であり、経済学、政治学、社会学などさまざまな学問分野で関連研究が進められている。社会関係資本研究の方向性としては、ブルデューらによる、社会関係資本を「人脈」ととらえ個人に蓄積するとする方向と、パットナムらによる、人と人の間に蓄積するとする方向に分かれる。本研究では人々が繋がり協力することで形成される社会的な価値を分析するにあたり、地域社会の活性化につながる議論が豊富なパットナムの社会関係資本に着目する。

3-1. パットナムの社会関係資本

パットナムは、イタリアにおける社会関係資本の研究において、アマチュア・サッカー・クラブ、合唱団、ハイキング・クラブ、野鳥観察クラブ、読書会など市民が積極的に参加し水平的につながる市民コミュニティ（civic community）の数が多いほど州の行政制度の効率性が高いことを実証した（Putnam 2001）。なぜイタリア各州の行政制度の効率性に市民活動が影響を及ぼすのか。パットナムはこう述べている。

> 市民団体への参加は、皆で力を合わせて物事に取り組もうとする努力に対して、責任を共有する感覚、さらには人々がその共通に望む目標を追求する術も養うのである。さらに、多様な目標・成員を有する「横断的」集団に個人が属する場合、彼らの態度は集団の相互作用や交差圧力の結果、穏健になる傾向がある（Putnam 2001: 108）。

ひとつの目的に向かって価値観の異なる他者と力を合わせる。その過程で、「一般的信頼[4)]」による他者との繋がり方を学習する。

このような「一般的信頼」関係で繋がった人々で構成されるいろいろな集団が地域で活動することで、地域社会に「一般的信頼」が広がっていく。それによって、地域住民は集合的ジレンマ解消のために「一般的互酬性」を実践する。やがてそれは地域社会の中で規範化されていく。

家族など特定的な信頼関係だけが成立しており、それ以外は「泥棒と思え」と信じられているようなところでは、知らない相手となんらかの取引をする場合、相手が信頼に足る人物

4）相手の情報を十分にもっていない状態で他者を信頼すること。

かどうかをいちいち確かめなければいけない。対して、地域の人々と一般的信頼で広く繋がり一般的互酬性が規範となっているところでは、信頼の確認に要する労力は大幅に低減する。この違いが行政制度の効率性の違いとなって現れる。

パットナムは以上のような議論を踏まえ、社会関係資本を「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」と定義した（Putnam 2001: 206）。

パットナムの社会関係資本論は学術のみならず社会的に大きな反響を呼ぶ一方、さまざまな論争を呼んだ。

例えば、内閣府（2003）が行なった社会関係資本の調査によれば、社会関係資本の構成要素として設定した3要素である「つきあい・交流」・「信頼」・「社会参加」とボランティア活動を始めとする「市民活動」の間には、一定の相関（正の相関）があると推測し、ボランティア・NPO・市民活動への参加は、個人の交流やつきあいの範囲を広げていくことを通じて、社会関係資本の培養に寄与する可能性があることを指摘している。他方、坂本（2010）はパットナムによる社会関係資本の仮説が成立するかどうかについて、日本の地方政府を題材に詳細に分析しているが、イタリアや米国で確認されたような結果は確認できなかったと述べている。その理由として、検証の根拠となるデータが適切性の問題や、パットナムの調査では考慮されていなかった別の媒介変数が存在する可能性を指摘している。

社会関係資本の研究は、効果分析・概念化・生成過程の分析の3分野に分かれる（佐藤嘉倫 2018）が、本研究は生成過程の分析に該当し、定性的データに基づいて論を進める。

3-2.「架橋型社会関係資本」と「内部結束型社会関係資本」

パットナムは『孤独なボーリング』では、社会関係資本を「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である（Putnam 2000: 14）」と定義づけ[5]、新しく4つの下位概念を設けている。その中でも外部との関係構築を志向する「架橋型（bridging）社会関係資本」は地域の人々や市民活動などと繋がる性質をもち地域社会における「一般的信頼」を醸成するために重要であり、「結束型（bonding）社会関係資本」とともに社会関係資本に関わる研究では欠かせない概念である。

架橋型社会関係資本は「外向きで、さまざまな社会的亀裂をまたいで人々を包含するもの（Putnam 2000: 19）」である。パットナムがイタリアにおける社会関係資本研究で想定した、市民が積極的に参加し水平的につながる市民コミュニティで形成される社会関係資本がこれに当てはまるだろう。

一方、結束型社会関係資本とは、「内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していくもの（Putnam 2000: 19）」である。例えば家族のような同質的な強い人間関係では特定の人に対する信頼や特定の人が与えてくれた恩恵はそのひとに返すとい

5）『Making Democracy Work』における社会関係資本の定義に含まれていた「調整された諸活動」に関わる記述は『孤独なボーリング』の定義では除かれているが、パットナムは「人々の多様な集合の間で頻繁な相互作用が行われると、一般的互酬性の規範が形成される傾向にある（Putnam 2000: 17）」と述べている。「調整された諸活動」の意味するところを「相互作用」すなわち「対話」とし、一般的互酬性の規範の形成過程をより具体的に記述したものと思われる。

う特定的互酬性が発達する。

この分類で注意すべきは、社会関係資本が「結束型」もしくは「架橋型」のいずれかに分けられるものではなく、ひとつの社会関係資本にはどちらの要素も併存しているということである。まずは結束型が土台としてあり、そこから開放的な集団に参加することで架橋型の傾向が強まり、一般的信頼が広がっていく（佐藤編 2018）と考えるのが自然である。

本研究では以上のような議論を踏まえ、社会関係資本におけるネットワークに関する概念を中心に援用する。ここからは結束型社会関係資本におけるネットワークを意味するものとして「結束型ネットワーク」、架橋型社会関係資本におけるネットワークを意味するものとして「架橋型ネットワーク」と呼ぶこととする。

4．西宮市内のライブスポット

まず近郊都市におけるライブスポットの特徴について述べ、西宮市におけるライブスポットを類型化する。

4-1. 近郊都市におけるライブスポット

ライブスポットとは、「ジャズやロックの生演奏を聴かせる酒場やクラブなど（大辞泉）」と記されているように、一般的に「生演奏を聴く」ところとして認識されている。都心のライブスポットではそれに当てはまる事例は多いが、近郊都市では事情が異なる。

滞留人口が多い都心では、知名度の高い演奏家を招きその集客力で多くの客を集めるという興行的な運営が可能である。そのような店では先に述べたように客はもっぱらプロ演奏家の演奏を楽しむという形式が定石である。

一方、地域が対象となる近郊都市のライブスポットは集客が難しいため、店の規模は小規模にならざるを得ない[6)]。この地域密着かつ小規模という環境特性を活かし近郊都市のライブスポットでは、地域住民に対して「音楽鑑賞」に加え「音楽実践」の場も提供している。地域の人々はこの場を利用して、音楽による交流を行っている。

西宮市のライブハウスではこのような近郊都市のライブスポットならではの魅力をアピールする店も多い。イベントとしてセッション[7)]やオープンマイク[8)]の日を設定し、音楽実践の場としての利用を積極的に促している。

4-2. 西宮ライブスポットの類型化

「西宮ライブミュージックマップ」に掲載しているライブスポット26ヶ所を運営形態によって5種類に類型化する。

6）西宮市の場合は10席未満から最大で40席程度である。
7）演奏のために演奏者が集まること。ジャズでは演奏者が自由に集まって即興演奏を行なう場合をジャムセッションとよぶ。
8）店のマイクを飛び入り客に開放すること。

a. アマチュア参加型　10ヶ所（約38%）

地域のアマチュア演奏家を主体とした演奏が連日のように行われている。アコースティックな音楽だけに絞った10席にも満たない小規模な店や、プロ演奏家の伴奏で歌う店、沖縄民謡・二胡・アイリッシュといった多彩なプログラムを企画する店もある。オーナーも演奏家であることが多く、自らも出演する。

b. プロ混合型　7ヶ所（約27%）

主にプロの演奏家がオーナーであり、その繋がりでプロの演奏家がしばしば出演しオーナー自らも演奏する。演奏される音楽の分野はオーナーの活動分野に応じ、カントリー＆ウェスタン、ジャズ、ロック、ポップスと分野が別れる傾向にある。アマチュア演奏家も料金を払ってプロ演奏家とともに演奏に参加できるセッションデーが設けられているところもある。

c. リハスタジオ型　3ヶ所（約12%）

通常はバンド練習のためのレンタルスペースとして営業している。ライブはバンド練習用に使われている部屋を転用して不定期に行う（スタジオライブと称される）。レンタルスタジオ利用者が対バン[9]形式で出演することが多い。爆音系バンドは音量の関係で出演できる場所が限られており、ライブスポットとして市内で対応可能なのはほぼリハスタジオのみである。

d. イベント型　3ヶ所（約15%）

通常はカフェ・パブ・食堂などとして営業し、定期もしくは不定期でライブを行う。出演者はプロ演奏家や地域のアマチュア演奏家である。オーナーは音楽愛好家であり、実演音楽のジャンルや運営形態はオーナーの音楽に対する思いが反映されている。たとえば通常は食堂として営業している狭い店内に極小の演奏スペースを設けライブを行う店がある。英会話教室の特別プログラムとして生演奏をバックに英語の曲を歌うというライブもある。

e. 鑑賞型　3ヶ所（約15%）

いわゆるバーやラウンジという形態で、飲食しながらライブ演奏を楽しむ店である。利用者はもっぱら鑑賞者として役割が固定されていることが多い。

5．ライブスポット事例紹介

類型化したものの中から、「音楽鑑賞」の場のみを提供している「鑑賞型」を除いていた4類からそれぞれひとつのライブスポットを取り上げ、関係者へのインタビューをそれぞれ1名おこなった。

9）ライブイベントにおいて複数の出演者が入れ替わる形でステージに立ち、共演すること。
　通常、対バン形式のライブはひとつのバンドの演奏の持ち時間が30分ほど、4～5バンドが連続して演奏する。

5-1. ライブスポットA［アマチュア参加型］

a. 概要

アイリッシュパブ形式の店。店内中央にコの字型のカウンターが設けられ、気楽に飲食や音楽が楽しめる。地域のアマチュア演奏家を中心に連日のようにライブを行なわれている。「飛び入りオープンマイク」、「ライブ初心者限定　ビギナーズNight！」、「フリーセッション」などのライブイベントが定期的に設定されている。席数約40席。レッスンも行っている。

b. インタビュー　T氏（利用者）

「ひじょうに明るい、楽しい、いい雰囲気のお店だなと、もう入り浸り」と10年ほど前からここに出演を続ける。2ヶ月に1度、自分が主催し「自分が司会をして演奏して、他にゲストに演奏してもらったり」という内容のライブを行なっている。

「ほかのライブハウスとか行ったら、演奏中は黙って聞いてくださいみたいな雰囲気のところも多いんですけど、ここはさほどそういう制約はなく、こっちでわいわいしゃべってても、まあええかな。ほんまにその音楽をぐっと聞き入ったら、みんな自然と黙って聞きますし。わいわいしゃべりながらでも、まあええかなというようなこんな雰囲気です、普段は」と語る。

［T］は現在障がい者の自立支援をサポートする事業所で働いているが、この仕事に就いたのはこの店で弾き語りしている［O］と知り合ったのがきっかけである。障がい者福祉の仕事に携わる［O］の話を聞いて仕事の現場も見学し、自立支援というところが「人のためになる」ことに加え、「ひとを育てる」というところが前職の教員という仕事とつながる部分を感じて転職した。今後はできる限り音楽とこの仕事を続けていきたいと語る。

【プロフィール】

62歳。中学からギターの弾き語りをはじめ、大学まで音楽系のクラブに入って学園祭に出演していたが、教員になってから一時音楽から遠のく。38歳で音楽活動を再開しコントラバスを練習し市内ライブスポットのジャムセッションに参加し腕を磨いた。その活動はジャズにとどまらず、市内のさまざまなライブスポットでバンドやソロで出演してきたが現在はライブスポットAの活動が中心である。

5-2. ライブスポットB［プロ混合型］

a. 概要

オーナーはプロの演奏家。ジャズライブバーとしてほぼ毎日プロの演奏を聴くことができる。ジャムセッションデーも設けられている。昼間は音楽教室（ベース、ドラム、ヴォーカル、ピアノなど）が開催されている。小規模な店内でライブ演奏を至近距離で楽しむことができる。席数約20。

b. インタビュー　S氏（利用者）

61歳の時にはじめてジャズヴォーカリストとして初めてライブを行なった。それ以来、2ヶ月に1度ライブを行うようになり現在も続いている。普段は地域にある複数のジャズのライブスポットで歌っている。ライブスポットBは知り合いの音楽家の紹介。店のオーナーでもあるプロの音楽家から指導を受けている。家が近いこともあり8年前から通っている。

「僕はサラリーマン一筋やったでしょ。仕事ではうわべだけの付き合いで、なかなか友達

できないんです。ところがセッションとか行くと、年齢とか性別関係なしに、純粋に歌の好きな人同士やから、すぐ打ち解けるんです。ジャズ歌仲間っていうのが20人ぐらいできて、その人たちのライブにいったり、あるいは僕のライブにその人らが来てくれたり」と［S］は語る。また、男性ヴォーカリストは女性に比べると圧倒的に少ないため、珍しいこともあって友達の輪がどんどん広がっていく。一方、「音楽で知り合った知り合いはすごくいい友達やけど、個別にどっかで会うとか、それはないです。あくまでもライブハウスで」と語る。

【プロフィール】

74歳。大学生のころからジャズを聴いていた。30年ほど前、接待で都会のジャズバーに連れていってもらいライブの楽しさを知り、ピアノに伴奏してもらって歌うこともあった。その後、女性ヴォーカリストの歌唱を聞いて感動しヴォーカルのレッスンを受け、人前で歌う楽しさに目覚める。

5-3. ライブスポットC［リハスタジオ型］

a. 概要

バンド練習、ライブ会場、音楽教室（ベース、ドラム、ヴォーカル、ピアノ、三味線など）とさまざまな用途で活用されている。スタジオライブは演奏者と鑑賞者の距離が近く、特に爆音系ライブで活用されている。対バンライブもしばしば行われている。席数約40。

ライブスポットCの中心業務はバンド練習のためのスタジオレンタルである。バンド練習では固定されたバンドメンバーがスタジオに集い曲を作り込んでいったり完成度を上げるためにリハーサルが繰り返されている。

b. インタビュー　K氏（利用者）

スタジオを利用するようになったのは2年ほど前、音楽表現のスキルアップのためにスタジオのギター教室に通うようになったのがきっかけ。今ではスタジオのオーナーと2人だけのバンドを組んで、ここのスタジオライブに出ている。「観客との距離が近いというのがあって、すごい熱気、息遣いまでわかる」と［K］はそのよさを語る。対バン形式のスタジオライブは他のバンドとの交流の場でもある。「みんな音楽好きなんで音楽から会話が始まる、『ライブすごいよかったよ』とか。そういうので仲良くなっていく、実際ここでたくさんのひとと友達になりました」。最近はこのスタジオを使って自分がプロデュースしたライブもする。自分が習っているギターの先生のデュオ、このスタジオで知り合ったバンド2組、そして自分のバンドを加えた4バンドの対バンライブである。

「こないだこのスタジオにふらっと来られた方から『詩を書いているので作曲してほしい』と依頼があり、作曲している最中」という。ここは単なるスタジオではなく「音楽を通じてひととつながり、そこからいろいろ広がっていくところ」と［K］は感じている。

【プロフィール】

40歳。上京し建築関係の学校に進学するがバンド演奏に目覚め、メロディックコアやパンク系の音楽活動に4年ほど取組む。紆余曲折を経て10年ほど前に関西に戻る。その後、独学で絵を描くようになり、現在では絵画と音楽を組み合わせた表現に取り組んでいる。

5-4. ライブスポットD［イベント型］

a. 概要

地域のコーヒー専門店。店内はオーナーの趣味で統一され、ここちよい空間となっている。通常はカフェとして営業されており、ライブはおおよそ月に1度の頻度で行われている。演奏はウクレレジャズなどウクレレにちなんだ音楽が中心。席数約20。ウクレレのレッスンも行なっている。

b. インタビュー　F氏（オーナー）

ライブを店の売りにしたいからライブをしているのではなく「この店はなにもかもが僕の趣味」、「自分の趣味をここで実現して、自分ができることはこういうことで、それに巻き込まれたいひとが巻き込まれる」それを通じて「自分の余暇活動とか人生に対して楽しみと思えるようなものをその人なりに見つけてほしい。そのきっかけをここで作りたい」と［F］は語る。

ライブの日はカフェ営業は休みにして、昼からセッティングをした後にリハーサルをして、夕方から本番というパターンが多いが、「営業中にランチしてるお客さんがいて、アーティストがライブの準備でごちゃごちゃ機材を触っている」ということもある。

ライブを見に来た観客同士が友達になって、最初のころは別々のグループでライブを見に来ていたのに、何回かするとひとつの大きなグループになることも多いという。

【プロフィール】

42歳。音楽とは無縁だったが25歳のころにウクレレと出会い弾くようになる。もともと介護関係の仕事をしていたが、転職してカフェをはじめて12年になる。コーヒーについては、厳選した生豆を注文ごとに直火で手焙煎するというこだわりを持っている。お客さんと話し込んでしまうこともしばしば。

6．分析

6-1. ライブ演奏が人と人を引きつける

「純粋に歌の好きな人同士やから、すぐ打ち解ける［S］」「みんな音楽好きなんで音楽から会話が始まる［K］」「最初ころは別々のグループでライブを見に来てたのに、何回かするとひとつの大きなグループになる［F］」と、実演音楽が持つ人と人を引きつける力を実感する意見が多い。

「音楽で知り合った知り合いはすごくいい友達やけど、個別にどっかで会うとか、それはないです。あくまでもライブハウスで［S］」という発言から、架橋型ネットワークの特徴である繋がりの浅さが確認できる。

6-2.「聴く」ことを強いない空間

ライブスポットAではアマチュア演奏家を中心にライブが行なわれている。実演音楽をおしゃべりの賑やかしとして楽しむもよし、聞かせどころが来ればじっくり耳を傾けるもよしという自由な雰囲気で、気軽にライブを楽しめる工夫がされている。また、実演経験が乏

しかったり、この店に馴染みのない演奏家でも気軽に参加できるようなイベントを設け、敷居を低くする工夫もされている。誰でも楽しめ、誰でも参加できるという開放的な環境によって、ライブスポットAをベースとして架橋型ネットワークが広がっている［図-1］。

6-3. 複数のネットワークを繋げる

「ジャズ歌仲間っていうのが20人ぐらいできて、それでその人たちのライブにいったり、あるいは僕のライブにその人らが来てくれたり」と［S］とジャズ仲間たちはひとところに留まらず複数のジャズ系ライブスポットを回遊することで、複数のライブスポットを繋げた架橋型ネットワークが構築されている［図-2］。

6-4. 結束型ネットワークと架橋型ネットワーク

ライブスポットCはポップスやロックのバンドが練習のためにスタジオを利用する。このようなアンサンブル重視の音楽はバンドでの練習が必要とされる。練習を重ね完成度を高

各ライブスポットにおける人的ネットワークの広がり（概念図）

図-1 **ライブスポットA**

(アマチュア参加型)

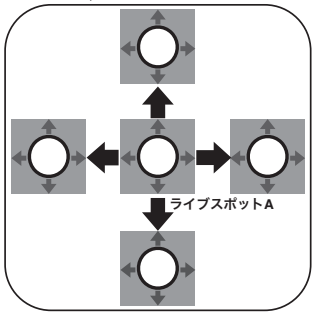


図-2 **ライブスポットB**

(プロ混合型)

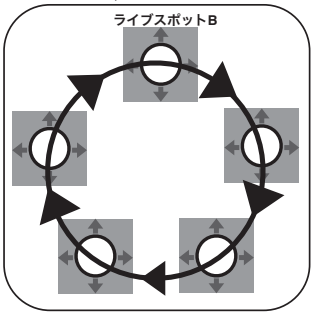


図-3 **ライブスポットC**

(リハスタジオ型)

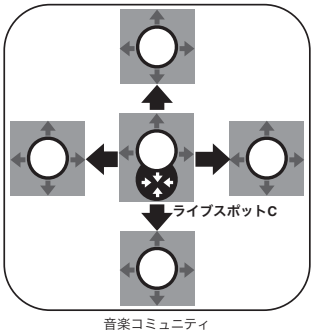
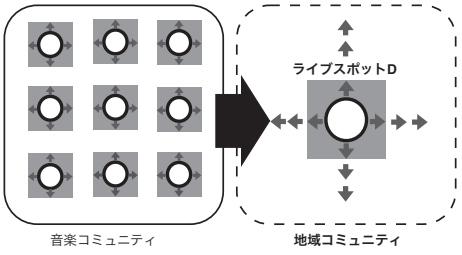


図-4 **ライブスポットD**

(イベント型)



めた演奏をお披露目するのがライブである。音楽スタジオという場ではバンドのアンサンブルがまとまっていく中で、バンドメンバー間で結束型ネットワークが築かれる。一方、対バン形式で行うスタジオライブの場としての音楽スタジオからは、他のバンドメンバーとの交流を通じ架橋型ネットワークが広がっている［図-3］。

6-5. 音楽コミュニティを地域に繋ぐ

ライブスポットA・B・Cは地域の音楽コミュニティの場であるが、ライブスポットDがライブスポットとなるのはイベントの時だけであり、通常はカフェという地域コミュニティの場である。イベントとしてライブを行なうことで音楽コミュニティの架橋型ネットワークが地域コミュニティに繋げられる［図-4］。

7．考察

7-1. 人と人を繋げる実演音楽

なぜ実演音楽は人と人を繋げる力があるのだろうか[10)]。

実演音楽において身体の動きや音を互いにシンクロさせることで人は他者との一体感を経験し、社会的な結束や仲間意識を得ることができる（トリノ 2008)。これについてライブ演奏のパフォーマンス性に焦点を当てて深掘りしてみたい。

パフォーマーとしての演奏者は鑑賞者を巻き込みながら音楽を実演する。そこでは演奏者が主（ぬし）で鑑賞者が客という関係性ではなく、演奏者も鑑賞者も共に主体となってライブという出来事を創り楽しむ。それがライブ演奏の醍醐味である。鑑賞者は自らも表現者として、リズムを取ったり、足踏みをしたり、掛け声を掛けたりし、演奏者や他の鑑賞者に対して音や視覚で反応する。演奏者はそれを受け止め、音楽を通じて反応する。それを受け止めた鑑賞者は‥‥このような自己言及的なやりとりを重ねることで、いつしかライブ空間に一体感が充満していくわけである。

また音楽実践や鑑賞を「趣味」の観点から見ると浅野（2011）によれば、趣味でつながることによって、生活環境の違いが目立たなくなり交流の敷居が下がる、趣味を通しての関係は集団の外でのさまざまな上下関係を無効するという2点から、社会的地位に対して趣味が前景化され、繋がることへの障害が軽減される。

7-2. ジャズ演奏家がライブスポットを回遊する理由

ライブスポットBにおいてジャズ仲間が回遊する理由について考察する。

ジャズヴォーカルを含めジャズ演奏家は複数のライブスポットを回遊する傾向にある。その理由としてふたつ挙げられるだろう。

ひとつはモダンジャズが、「ゲーム化、スポーツ化した音楽」だからである。モダンジャズ

10）パットナムもアメリカで弱体化している社会関係資本を再生させるための具体的な取り組みのひとつとして、「集団でのダンスや歌の集い、大衆劇団からラップ・フェスティバルまでの文化活動に（単に消費したり「鑑賞」したりではなく）参加すること」を勧めている（Putnam 2006: 206)。

では題材とする曲の中からコード進行やリズムなど曲の骨組みだけを取り出してそれを土台に即興演奏をし、その演奏内容の新規性や審美性を競う（菊池・大谷 2005）。

もうひとつはモダンジャズが「一期一会を楽しむ音楽」だからである。即興演奏では他の合奏者と音で対話しながら旋律を奏でる。通常の対話がそうであるように、相手（合奏者）の反応によって演奏内容が変化していくが、それは演奏者自身も予測ができない。そういった偶然性を楽しむ。

このような性質を持つ音楽であるが故に、ジャズ演奏家は合奏者との新たな出会いを求め、しばしばあちこちのライブスポットに出没すると考えられる。

7-3. 社会関係資本が持つ排他性

人と人を繋げる力を持つ実演音楽の作用によってそれぞれのライブスポットやそれらを包括する音楽コミュニティの中では架橋型ネットワークが動的に機能している。しかし、それが音楽コミュニティ内に留まりがちなのはなぜだろうか。

社会関係資本において内部志向が強まると「排他性」が生じるとしばしば指摘されている。音楽にしろスポーツにしろ、なんらかの共通するテーマを頼りに人は集団を作る。共通したテーマの条件が狭まれば排他性は強くなり、広まれば排他性は弱くなる。しかし、いずれにしても条件に合致しない場合は程度の差こそあれ排除される方向へ向かうだろう。このように考えると、結束型社会関係資本だけでなく結束力が弱く関係性が薄い架橋型社会関係資本であっても、「音楽」という括りがある限り排他性を取り除くことは難しい。そのため、音楽コミュニティでひろがっている架橋型ネットワークを地域社会へと繋げるには、排他性の壁を超えることが必要となってくる。そこで、ライブスポットDのように「イベントとしていわば仮設的にライブスポットを地域コミュニティに出現させる」ことがその方法となる。ライブスポットA・B・Cで広げられた架橋型ネットワークは地域コミュニティにイベントとして突如出現した通路を通じて地域社会へも広がっていくのである。

このイベントを差配するのは［F］のような「文化仲介者」である。文化仲介者とは、アーティストや知識人の審美的な好みや感性に共感し、それを一般に伝える役割を持つひとのことをいう（Featherstone 1991）。アーティストや知識人と一般人の間に立って、アーティストであれば作品の楽しみ方、知識人であれば発せられたメッセージの読み解き方を伝えてくれる。「自分の趣味をここで実現して、自分ができることはこういうことで、それに巻き込まれたいひとが巻き込まれる」という発言が［F］の文化仲介者としての姿勢を表している。

7-4. 地域コミュニティへ結節することよって広がる可能性

音楽コミュニティの「架橋型ネットワーク」を地域コミュニティへ結節することからなにが広がっていくのか。その参考となるのが高槻市にある「JKカフェ」の取組みである。例年5月の連休に高槻市で行われる「高槻ジャズ・ストリート」は10万人規模の集客を誇るが、この音楽イベントが行われるきっかけとなったのがこのカフェである。

この店では毎日のように地域内外の演奏家たちによる生演奏が行われている。しかし、店はライブハウスではなくあくまでカフェとして営業されている。多くの客はライブ鑑賞というよりもカフェの客であり、演奏中であっても店内はおしゃべりが絶えないが、ここでは

じめてジャズの生演奏に触れた客も多い。この取組みによってジャズという音楽が市民へ受け入れられ、「高槻ジャズ・ストリート」という街なかイベント開催の素地が形成された。

このイベントの運営は主婦、学生、シニア世代など約1,500名もの市民ボランティアで支えられており、ライブ音楽イベントを通じて都市生活者の実状にあった「縁」が再構築された事例として評価されるべきだろう。

音楽コミュニティと地域コミュニティとの交流はネットワークを拡大させ、ライブスポットも含めた音楽コミュニティと地域社会を繋げる可能性を持つ。その鍵となるのは、音楽コミュニティ外の人々も出入り自由な、「ライブスポットであるようなないような曖昧な空間」とそれをプロデュースする文化仲介者の存在であると言えるだろう。

8．終わりに

日本の都市社会における音楽実践を通じた「縁」の再構築の可能性という問題意識を踏まえ、西宮市という近郊都市をフィールドとして社会関係資本の概念を援用し分析をおこなった。

まず、西宮市内のライブスポット26ヶ所を対象にフィールドワークを行い5つに類型化した。そのうち「鑑賞型ライブスポット」を除いた4つのタイプそれぞれライブスポットひとつを取り上げ関係者にインタビューを行い分析を進めた。

考察では、各ライブスポットに共通して見られた「実演音楽が人と人を繋げる力」について、身体の動きや音を互いにシンクロさせることや、演奏者が鑑賞者を巻き込み共同主体化していくプロセスによって一体感が醸成されることを述べた。ジャズ系ライブスポットのみで見られた「ジャズ演奏家がライブスポットを回遊する」理由について、ゲーム性や即興による対話性というモダンジャズの特性から読み解いた。

さらに、4つのライブスポットにおけるネットワークの生成の構造について、ライブスポットA・B・Cでは、架橋型ネットワークは音楽コミュニティ内では活発に広がるが、ライブスポットDはそれを超えて地域社会へ繋がる可能性を持っていることに注目した。その点でイベントとしてライブを位置付けるライブスポットDの取り組みは、社会関係資本が持つ排他性を超えるために重要であり、そこには文化仲介者の存在も不可欠であるということを述べた。

最後に、音楽コミュニティの「架橋型ネットワーク」を地域コミュニティへ結節することから広がる可能性について「高槻ジャズストリート」を取り上げ、この音楽イベントが主婦、学生、シニア世代など約1,500もの市民ボランティアで支えられ、都市生活者の実状にあった「縁」が再構築されていることを示した。

その鍵となるのが、音楽コミュニティ外の人々も出入り自由な、「ライブスポットであるようなないような曖昧な空間」であるということを指摘した。

本論を書き終えようとする今、期せずしてライブスポットAが「音楽以外のイベントも積極的に企画し、『アミューズメントバー』と呼ばれるスペース作りに取り組む」ことを知った。音楽コミュニティと地域コミュニティの結節に繋がるであろう野心的な取り組みに期待したい。

調査地とした西宮市は「文教住宅都市」を宣言するほど文化と教育を重視しており、音楽実践人口の裾野も広い。近郊型ライブスポットのさまざまな種類のサンプルデータを得ることができたのは、そういった土地柄によるところが大きい。逆にその恵まれた環境が事例研究としての汎用性に欠けるという点において、本研究の限界を招いていることは否定できない。

今後は同じフィールドで「一般的信頼」について定量データに基づいた効果分析に取り組みたい。

謝辞

調査にご協力いただいた西宮市のライブスポットの皆様、西宮市文化振興課の皆様、そしてインタビューにご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

調査にあたっては、桑島ゼミの学部生に多大な協力をいただきました。感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。

参考文献

浅野智彦（2011）「若者の気分　趣味縁からはじまる社会参加」岩波書店：50.

菊地成孔・大谷能生（2005）「東京大学のアルバート・アイラー ―東大ジャズ講義録・歴史編」メディア総合研究所：45.

倉田和四生（1990）、「公民館とコミュニティ活動 ―西宮市の公民館・情報誌『宮っ子』・コミュニティ協会」『関西学院大学社会学部紀要』：22・34.

坂本治也（2010）、『ソーシャル・キャピタルと活動する市民 ―新時代日本の市民政治』有斐閣：121-122.

佐藤嘉倫編（2018）、『ソーシャルキャピタルと社会―社会学における研究のフロンティア』ミネルヴァ書房：46.

内閣府国民生活局（2003）、『平成14年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』：46-49.

Featherstone, Mike.（1991）、Consumer Culture &　Postmodernism, Sage Publication of London.（川崎健一・小川葉子 編著訳　池田緑 訳（1999）『消費文化とポストモダニズム』恒星社厚生閣：115）

Putnam, Robert. D.（1993）、Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy, Princeton University Press.（河田潤一 訳（2001）『哲学する民主主義 ―伝統と改革の市民的構造』NTT出版：110-119）

Putnam, Robert. D.（2000）、Bowling alone: The collapse and revival of American community, New York Simon & Schuster.（柴田康文 訳（2006）『孤独なホウリング ―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房）

Turino, Thomas.（2008）、Music As Social Life: The Politics of Participation, The University of Chicago Press.（野澤豊一・西島千尋 訳（2015）『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ』水風社：19-20）